

3. 「近代スポーツ」から

「現代スポーツ」への胎動 (II)

—その構造モデルの検討作業—

早川 武彦

はじめに、近代スポーツ：Modern Sportと現代スポーツ：Contemporary Sportの大まかな捉え方の違いを見ておきたい。

「近代スポーツ」は、統一ルール・統一組織のもとで力、エネルギー、技などによって技術・記録や勝敗を競うことを特徴としている。A. グートマンは、近代スポーツの特徴を、世俗化、平等化、専門化、合理化、官僚化、数量化、記録万能主義の7点上げ、なかでも記録化が平等化のもとで競われることに最も特徴が示されると説いた¹⁾。記録化志向の特徴は、技術を中心とした高度化を志向するベクトルとそれを生み出す量的なスポーツの普及を求めるところにある。近代スポーツは、これを技術的な高度化(質)と実践的な大衆化(量)で括ることで、その発展と広がりとの関係構造としてとらえられてきた。この技術を高めることも実践を広めることも「する」行為である。この「する」行為が、統一ルール・統一組織のもとで取り組まれると、統一ルール・統一組織の構成原理である効率性、競争性、記録性の作用によって、より質の高い技をめざすことになり、技術的な高まりに収斂されていくことになる。近代スポーツはこの「する」行為を重視し対象としてきた。行為すること(Do sport)にのみ、その本質をとらえ、見ること(See sport)は、本質的でないとしてきた。スポーツをするからには、練習を積み、腕を磨き、他者と競い、勝利をめざすことが求められる。この向かうところは、技術の高度化であり、それを押し上げるのはスポーツマンの増大、つまり大衆化である。このように近代スポーツは、統一ルール・統一組織の枠の中で「する」行為にのみ目を向けることによってその姿が形作られてきた。

これに対して「現代スポーツ」は、近代スポーツのリジットな「統一ルール・統一組織」の枠を超えたスポーツ活動を対象としており、その本質

は、「する」と「みる」の両者が一体化されて表現される「する・みる」とするところにその特徴が示される。現代スポーツは、必ずしも統一ルール・統一組織を必要とせず、力やエネルギーによる技や記録を競うものだけではなく、情報操作や優雅さなどの表現性や達成感を、仲間とコミュニケーションを交わしながら楽しむことを特徴とし、多様な組織的、未・非組織的形態の共存を特徴とする。また応援という行為も今日では、スポーツ的である。チアリーダーの演技は立派なスポーツといえよう。Jリーグなどの最近の応援は、それだけでスポーツ的とみなしうる。さらにメディア・スポーツのように映像化され、時間・空間を越えて楽しめるスポーツも現代スポーツに見られる新たなジャンルのスポーツである。もちろん現代スポーツには、近代スポーツも含まれる。つまり、現代スポーツは、近代スポーツ及びそれ以外の土着的なスポーツや新たに作り出されたスポーツなどが、生活様式にマッチして多様に展開されるスポーツの共生にその特徴があらわれている。

そこで以下では、近代スポーツが「する」を中心に据えた考え方(行為本性説)であることを批判した草深直臣論文(主として『運動文化論研究の生成と展開』)²⁾を手がかりに、近代スポーツにおける運動技術の捉え方について、分析を試み、「現代スポーツ」像のモデルを描き出してみたい。

なお近代スポーツは、運動文化に含まれるが、以下1、2では運動文化=近代スポーツとしてみていくことにする。

1. 運動技術の機能的概念

1) 「行為本性」としての「運動技術」：する機能

丹下保夫が運動文化論を提唱した時のキー概念の一つは、「運動文化の中核としての運動技術」である。この「中核としての運動技術」の理解を

めぐって、これまでは以下のように受けとめられてきている。それは、草深が批判的に指摘する、主体の側からのみ捉える「行為本性」説³⁾あるいは「行為至上主義」に立った理解である。運動文化は、一定のルールに規定された運動（行為）の様式である。この様式の中心をなすものが運動技術である。このことから運動技術の獲得（学習）が最も中心的な課題となり、課題獲得に向けた、様々な方法が検討される。その際、対象となる運動技術は、主体のする行為として受けとめられてきた。しかし運動文化は運動技術だけでなく、制度や組織なども重要な要件であり、欠かすことができない。こうした観点から、草深の批判が展開された。「行為本性説」に立つ理解では「スポーツ技術においても主体的契機が主導的役割を果し」、「スポーツ制度や組織は外在的」になり、「スポーツ主体の心的態度に解決が求められる」ことになり、「創造の過程に即した構造と機能を捉えること」ができない。彼はこう指摘してスポーツ技術・ルールはもとより制度・組織・思想なども運動文化（スポーツ）の内在的構成要素⁴⁾であるとした。そしてさらに鑑賞を「体育科教育の学習内容と領域」⁵⁾に、そして鑑賞能力を「体育の学力」に加えた⁶⁾。このことはスポーツを総合的にとらえる視点を与え、運動文化・スポーツ構造の総体的構造把握に大きく迫ったものとして高く評価されるものである。

しかし彼はそれが運動技術とどのような関係で構造的に位置づくかは明示していない。彼は、スポーツ構造を客観的にとらえるためにプレイ／組織／制度・社会的関係を同心円的に描くのではなく重層化してとらえることを主張し、土台・上部構造論的な構図において制度や組織もスポーツそのものであるとするのだが、行為本性説を脱却し、スポーツの主権者として必要な制度の主人公になる能力を強調し、運動文化・スポーツを客観的に描こうとする余り、制度や組織的な面が重視されプレイ場面が相対的に軽視されてしまっている。

ここで問題となるのは、かつて丹下保夫が「運動文化の中核としての運動技術」を主張したこと

の意味と方法である。丹下は、「運動文化とはどんな文化か」に対して次のように述べた。「運動文化が労働や芸術活動と異なる点は、意図的、計画的にこのような生物的運動欲求のよろこびをつくり出すためにつくられた活動であることである。」⁷⁾。そして「運動技術というものが運動文化の本質をな」し、この「運動技術によって単なる生物的運動欲求の活動ではなくて、より上手になりたい、より美しくやりたい、よりフェアーにしたいというような人間的欲求に支えられたものになり」、「この人間的な運動欲求が運動文化を生み、運動文化を発展させてきた。」⁸⁾。この運動技術が生産技術や芸術などの技術と決定的に違う点は、労働・生産や芸術の技術のように「手段」ではなく「目的」となるからである。労働や生産そして舞台芸術などにおいても技術は問題となるが、その場合、前者ではものを作る手段であり、後者では表現の手段となっているというのである。このように丹下が「運動文化の中核としての運動技術」と表現したのは、労働や他の文化と区別するための方法から導き出されたもので、そのことに主たる意味がある。従ってかつて川合章⁹⁾や草深¹⁰⁾らが指摘したように運動文化即運動技術とはならないことや、組織や制度をも運動文化の重要な構成要件であるとする批判的指摘は、当を得ているとはいえ、運動技術を「する」という行為本性だけで捉えるのでは丹下の主張の根拠を理解することにはならず、多様化する今日のスポーツ状況を整理し、体系化していくことはできないであろう。

丹下が提唱した「運動文化の中核としての運動技術」という運動文化の概念規定の考え方（方法と意味）が、有効となるためには、運動技術そのものの捉え方が主体の「する」という行為本性としての理解にとどまらず、主客の行為として「みる」機能をも明確に位置づけていかなければならない。

2) 運動技術のもう一つの機能：みる

運動技術のとらえ方は、金井淳二がいうように「（スポーツ過程における）技術はスポーツ手段

の一定の特殊な体系（システム）であり、またその体系一般である」¹¹⁾ ということができるが、ここでは運動技術を直接「する」行為に関わる技術（自分の身体、身体の延長としての用具などの操作）と施設や用具といった直接「する」行為に関わらない技術（操作を規定する物的条件）に分けて考えることにする。（ここでは労働とのアナロジーで運動技術を考えないでおく）。こうした運動技術において、これまで技術の操作性は運動技能との関係で考えられていたが、技術の鑑賞性は考えられていなかった。ところが運動技術を「行為本性」ととらえることはもとより、直接間接技術（スポーツ手段の体系）とだけ見るのではなく、運動文化・スポーツをその「創造の過程に即した構造と機能」としてみると、運動技術は「する」機能性だけでなく「みる」機能性も含まれていることが浮かび上がってこざるをえないだろう。草深がこの点に関し、「スポーツはプレイなんです、プレイと同時に鑑賞でもあることを強調しておきたい・・・スポーツをもう少し本質的にわかりやすく表現しておきますと共に競い、共に高まりあい、・・・共に讃え合う。この讃え合う為にはしっかりとした鑑賞能力が育っていないと讃え合うことにならない・・・もっと客観的な作品としてスポーツを鑑賞していく、これは技術能力であると同時に独自の鑑賞能力でもある」¹²⁾と述べていることは大変重要なことである。それだけに「スポーツを鑑賞することが技術能力である」ともいうとき、技術と鑑賞性に関する説明がそこではなされていないのが大変残念である。この点に関し、草深は、「現代スポーツの構造とイデオロギー」論文で、従来のスポーツ把握をスポーツの行為至上主義と批判し、新たなスポーツ把握としてスポーツ鑑賞を重視した「スポーツ表現の普遍的構造把握」を提唱し、「創造と鑑賞の緊張的な発展関係」の定立を求めている¹³⁾。スポーツが芸術や舞台芸術と「同一の構造と機能を」もち「行為性と作品性を同時的に内包しつつも、創造と鑑賞を対自化する」ものとしたのは同感である。その場合それがスポーツ技術とどのような

関係にあるのかが問われよう。果たして丹下が言うように「運動文化の中核としての運動技術」という把握は、行為至上主義・行為本性説に留まってしまうものなのか。そこで運動技術における行為性と鑑賞性について論じることにする。

運動技術はこれを獲得する過程で、つまり技能として身につける過程で、その行為者（たち）自身が運動技術を常に客観化して見ることなしにはうまく獲得できない。この運動技術を客観化する過程ないしは客観化する行為は、「みる」機能性を用意していることになる。これはプリミティブな鑑賞性ということができる。この行為者の「みる」機能性（プリミティブな鑑賞性）は他者の見る行為と共通性をもつことができる。他人からの指摘が的を得ていると納得するのはこのプリミティブな鑑賞性の土俵が成り立つからである。つまりそれを共有することができる。このように行為者の見る機能的行為は他者の見る機能的行為へと「みる」機能性が客観化され、それが鑑賞性の基盤を形作ることになるのである。阪田尚彦は、ロシアの優れた心理学者であったルビンシュテインに学びながら運動技術の学習過程について学習者は「行為の執行者」と「内面の調整者」という二つの人格を持つと指摘した。曰く「運動技術の学習とは、運動を行っている自分とその中にいる『もう一人の自分』とが相談しながら目的に向かって進行している過程である。」¹⁴⁾。これは主体の側の学習過程であるが、「内面の調整者」はまさしく見る行為であり、技術認識には欠くことのできない機能であることを述べたのである。この見る機能行為は、言語認識を伴う鑑賞性として他者との関係でも共有しうるものである。観衆、応援、批評行為はこの鑑賞性の基盤の上になされるもので、する行為から一見独立しているように見えるが、実は運動技術というねっこの部分においてすることと一体的な機能をもっているのである。観衆、応援、批評行為はする行為と区別されるが、機能的に区別されるのであって、する行為と有機的に結びついている。機能的に区別されているというのは、する行為者にも「みる」機能が、

そして見る行為者の側にも「する」機能がそれぞれ存在していて、する行為者にとっては「する」機能が、見る行為者にとっては「みる」機能が主要な行為となって現れてくることを意味している。であるからする行為も見る行為も常に立場を逆転させることができる。する行為から見る行為へ、見る行為からする行為へと。これは個人のレベルであっても集団のレベルにあっても基本的には同じ関係で成り立っている。

いまこれをＪリーグで考えてみよう。プレイヤーと観衆・応援の関係は、すると見るの関係である。プレイヤーは所を変えれば、つまり他のチームの試合となればすぐに観衆になれる。観衆・応援はどうか。多くの観衆・応援者もやはり所を変えれば自らがサッカーをプレイするであろう。またある観衆・応援者はまだサッカーをしたことがないが、機会があればしたいと思うサッカー予備軍である。そしてこの予備軍の中には、他のスポーツをしたり、経験しているものも多い。観衆・応援者はプレイヤーと一体化する自己陶醉感に満足しているだけでなく自らもプレイを楽しむ契機をつかもうとしている。サッカー少年の増大は見るからするへの機能転換の現れといえよう。中澤らの研究では、「'92 Jリーグカップ」の観戦者行動において「一般に観客の年齢層は若年層が主体であった」こと、および女性の一年未満の観戦者が多く、潜在的な観戦者は、3分の1相当いることを明らかにしている。（「プロサッカーの観戦行動に関する社会学的研究」『スポーツ産業学研究』第2回学会大会号、1993）。ここには、「するからみる」への行動予備群が、多数存在していることが示されている。

こうしたスポーツ経験とスポーツ観戦の関係の研究は、これまでそれほどなされていない。原田らの研究（「スポーツの観戦者行動に関する一考察」『スポーツ産業学会研究』第2回学会大会号、1993）によると、先行研究には、観戦者と経験者との関係が、まったくないとする Shamir and Ruskin (1984) の見解と、関係があるとする Godbey and Robinson (1979) の見解の両者があり、この

点をふまえた上で、調査研究を実施し、結論として、スポーツ経験者のスポーツ観戦に強い関係があることを明らかにしている。ただし、原田らの研究においても、これまでの研究と同様に、スポーツ観戦者からスポーツ経験者への行動影響がどう作用しているかの研究はなされておらず、「みるからする」への関係は明らかになっていない。

いずれにしても、これまで近代スポーツが「する」側面だけで見られてきたのは、冒頭にもふれたように、近代社会が、近代スポーツを普及・発展させる立場から、統一ルール・統一組織のもとでの効率性や競争性をめざす頂点志向のピラミッド型を求めてきたからであり、さらに「みる」側面を政治や資本がうまく利用し、自己の利益を増大させつつ、両者の補完的關係においてスポーツらしさを作り出すように装ってきたからである。しかも後者の力は強力でとりわけ資本の力は、「する」側面を観させる方向へ強引に誘導するなどその影響は絶大である。こうして「みる」側面は、資本や政治の手によってうまく利用され、「する・みる」が商業ベースや政策意図にうまく乗る形で意図的に切り放され、近代スポーツと資本・政治の両者の閉じた関係を維持してきたからである。これまで「する・みる」を切り離して論じてきた背景には、これらの要因が余りにも大きかったのしかかってきていた。意図的に「する・みる」を切り離すことで経済的な利潤を獲得しようとしたり、スポーツ体制を権威で維持したり、安上がりなスポーツ政策の展開をもくろんできたのである。また、Ｊリーグでも問題となり始めている「賭」もこの傾向を表したものである。スポーツと賭の関係は、これも今日に始まったものではなく、「みる」機能の一面化から生じているもので、その歴史はきわめて古い。この問題も今後検討していかなければならない重要なテーマである。

運動技術を「する」対象だけにとどめてしまえば、そこには表現性やコミュニケーション性（この問題についてはここでは触れないことにする）、鑑賞性といった本来運動技術として規定されるべ

き要件が見落とされてしまうのである。丹下が「運動文化における中核としての運動技術」と規定した背後には運動文化を労働や他の芸術文化と区別する必要があったからであったが、運動技術が「する・みる」機能性を内包していると考えれば、草深が批判しているような「運動技術中核説」が「行為本性説」に閉じることなく、さらにこの規定が鮮明になってくるであろう。したがって運動技術を「する」側面からとらえ、これをもとに「高度化と大衆化」の枠組を設定し、その質的な内容把握のために、技術・組織・歴史領域（中村）や技術・技能的能力、組織・管理・運営能力、社会的統治能力（草深）が領域化されてきたのであれば、再度これらの内容構成について検討していかなければならないだろう。そうでなければ、新しい運動文化やスポーツを生活の中で受け入れ再創造していく力や組織・体制のあり方などは見えてこないからである。

もう一度整理しておこう。従来の運動技術の考え方を、草深は「行為本性」説として批判し、そのことでスポーツ制度や組織が「外在化」させられ、スポーツの中心的な問題からはずされてしまっていることを指摘した。これはスポーツの「する」側面から脱却することを強調し、スポーツを総体的・構造的にとらえようとした点で重要かつ鋭い指摘である。しかしそれでもなおスポーツの「みる」側面が見逃がされているように思われる。いずれにしても「する」ことが第一義的で「見る」ことは二義的だとする従来のスポーツ論では運動文化・スポーツ文化を総体としてとらえることができなくなっている。スポーツが高度に発達した要因は、決してする技術的行為だけによるものではないはずである。制度・組織・科学・研究はもとより、観客・応援・鑑賞・批評・メディアといった見る要因も大いに作用しているのである。そしてこのことは、高度なスポーツだけにみられるものでもなく、また今に始まったことでもない。（歴史的にも多くの文献・資料などがそのことを示している。また近代スポーツ以前は組織や制度など余り問題とされていなかった。この点でこれ

らの「外在化」は問題にならない）。一個人においても運動技術を身につけていく時に自己の行為を客観的に見、問題となる部分をチェック（言語的認識としても）する。さらにコーチや指導者、仲間からさまざまなアドバイスをもらい改良を加えていく。これらの過程は見る行為であり、この行為を拡大していくと鑑賞や批評に発展し、観客や応援の目を通してさらに高められていくのである。これは、体育授業における「できる・わかるの関係」としてわれわれがこれまで大事にしてきた問題である。今日見るスポーツはそれ自体独立して一人歩きしているかに見え、またそれをよいことに利潤の対象としてスポーツを食べ物にしている状況が見られるが、これらの現象は、科学やメディアの発達によってこれまで以上にクローズアップされてきているもので、こうした部分的で一面的な側面の強調を避けるためにも、「する・みる」文化として運動文化・スポーツを一体化して対象化しなければならないのである。

なお「『技術そのもの』を広義に理解し意味付けをすればする程、『技術』の肥大化と絶対化が生じ、・・・荒木理論にふれて指摘した誤りを繰り返すことになる」¹⁵⁾と草深が指摘した問題については「する・みる」観点からさらに検討していく必要がある。

2. 「高度化と大衆化の統一」論からの脱皮

運動文化・スポーツの中核を運動技術とする考えに立ち、さらに運動技術が「する・みる」機能性という二側面でとらえることによって見えてくるものはなにか。この最も特徴的なものは運動文化・スポーツのとらえ方に現れる。かつて草深は、運動文化論の発展のためにおこった長大な論文「運動文化論研究の生成と展開」において「内省的な考察」として、すでにみたように行為至上主義的なスポーツ把握では、スポーツ手段が外在的になり、組織や制度がスポーツの内在的構成要件とならず、「スポーツ手段の体系及び所有関係と体制」に言及しない限り「文化の創造」はあくまで「方法的刷新・改良」にとどまり、「技術革

命」にはなりえないと、これまでの運動文化論研究を厳しく批判し、「国民運動文化の創造」に向けた自論を展開した。その中で彼は、「『技術問題』を、・・・“国民スポーツ”の発展、つまり大衆化と高度化の統一の内在的環として位置付けることを主張している¹⁶⁾。そしてこの「大衆化と高度化の統一」論は、その後の彼のスポーツ論において重要なキーワードになっているばかりでなく、国民スポーツ論を展開する上での多くの者の共通認識となってきた。〔要検討：技術と集団が安易に高度化と大衆化に置き換えられていないか〕。

ところでスポーツは、中村敏雄が主張するように、近代スポーツをさし、近代以前にはスポーツというタームは存在していなかった¹⁷⁾。しかしスポーツ的な活動や文化は勿論行われていた。古代ギリシャ、アテネ、ローマのギムナステークや古代オリンピックはまさしくスポーツ的文化であり、これらの文化の伝統や継承の上に近代スポーツが誕生してきたのであることは周知のことである。スポーツというタームが適切でないとするれば運動文化がびったりする言葉になろう。運動文化は人類の誕生以来ヒトが人・人間になる過程で、人間自らが創り出してきた最も人間的な行為である。近代はそれがスポーツという形で主要には表現され、文化として高められてきたが、さりとて近代スポーツだけが運動文化ではない。日本古来の伝統に根ざした武道も、また舞踊やダンスなども多分に運動文化の要件を満たすものである。近代スポーツは、そのメルクマールとして効率化された運動技術に加えて統ルール・統一組織をもってするが、この網にかからない運動文化はこれまで考えてこられなかった。特に最近各地の自治体が普及活動に取り組んでいる「ニュースポーツ」の類は、「スポーツの歴史的・社会的発展を考慮にいれず、単純な欲求の無原則的受容で進行」しているものとみなされている¹⁸⁾。「ニュースポーツ」を「社会的・歴史的発展を考慮」しない「単純な欲求の無原則的受容」とみなし、それは、「簡便さ、卑近さ・低俗性」を内容とする、「レ

クリエーション」的なものである¹⁹⁾とする。この考えの背後には、「スポーツの商品化」や「ゲスト主義」、「プレイ主体」の閉じ込めなどとして現れる「愚民化」政策批判があり、その克服を求めた「スポーツの主体形成」をめざす確たる思想が存在しているからである。この「スポーツの主体形成」の思想は、最も重視されねばならないものであり、それをカモフラージュする政策及びその推進は克服されねばならない。しかし、だからといって「ニュースポーツ」を全て切り捨てるというのでは新たな運動文化の創造を構築していく上で異論がでよう。

「ニュースポーツ」は、確かにその政策と推進の上で指摘されるような重要な問題をはらんでいる。しかし「ニュースポーツ」排除の立場は一方で新たな運動文化の創造の芽を摘むことになる。「ニュースポーツ」排除の考えの一因として、「ニュースポーツ」は技術の質の高まりが余り見られないことが上げられた。そしてそのことが大衆を「低文化」レベルに押しとどめ、「技術の高度化」との関係・統一を妨げる要因になっていると分析する。草深、金井両氏の「スポーツの大衆化と高度化の統一」の主張は、誰もが施設・設備、指導者、時間的な条件を確保しうることによって大衆化と高度化は統一して発展していくとみるもので、低文化（の質）に甘んじさせられるのは「ともに競い合い、ともに高まり、ともに讃えあう」スポーツから大衆を遠ざけるものでしかないというものである。運動文化の質を運動技術の技能化の面、つまり「する」機能的側面にとらえるところの主張は確かに説得力をもつ。しかし運動技術の鑑賞機能の面からみると、必ずしも技術の高度化を誰もが求めなければならないものと考えなくてもいい。「する」機能性と「みる」機能性との有機的な関係で運動技術をとらえることによって運動技術の質それ自体が多様性を持つことが見えてくる。従って「する」機能性に一元化しない、少なくとも「する・みる」両面の機能性を両極にもった運動技術を中核とする運動文化の像が描かれるのでなければ、今日のスポーツ状況を整理し、

説得的な新しいあり方を見ていくことはできない。

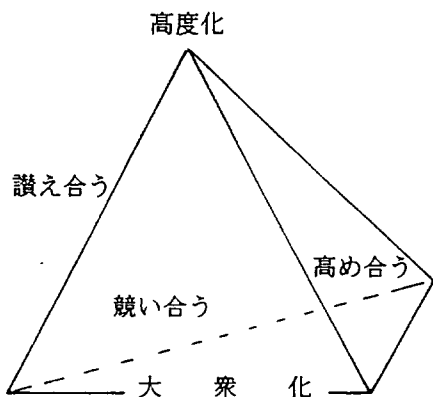
以上のことをまとめて図表化してみると以下の

3. スポーツの構造モデルの検討

A. 近代スポーツの構造モデル

(富士山型構造)

大衆化と高度化の統一



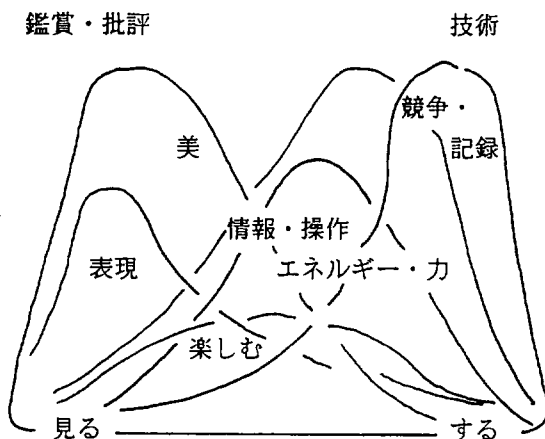
図Aは、これまでのスポーツ構造の描き方で、技術の高度化と大衆化が統一されたもので富士山型のモデルである。誰もが高度な技術の獲得をめざせるような、そしてさらに高度な技術を高められるような制度や体系を創りだすことで富士山型は大きくなる。その際、「ともに競い合い、ともに高まり、ともに讃えあう」ことが最重視される。このことによって富士山型は構造的に立体化し幅をもったものになる。大衆化は、「たんなる量的拡大」でも「愚民化・低俗化」でもなく、「大衆をしてスポーツの現代的な水準にまで組織し、普遍化することをつうじて、創造と質的向上の主体として形成すること」である。高度化では「高度化の努力と成果を国民的支持と統制のもとにおく」ために「トップアスレートの成果を普遍化しうる技術体系と科学的指導体系および大衆に組織的に還元するシステムが必要であり、かつ大衆の鑑賞を汲み尽くし、それ自体を向上させていく制度が不可欠」となる。²⁰⁾

それに対し図Bは、「する」機能と「みる」機能を両極においた連山型のものでハヶ岳型モデル

ようになる。

B. 現代スポーツの構造モデル

(ハヶ岳型構造)



である。「する・みる」両機能をもった山頂が両極の間にそびえ立ち、それぞれ思い思いの山頂や峰をめざして多様にスポーツを楽しむことが可能となる。それぞれの山頂や峰というのは、裾野に「する・みる」機能を要し、スポーツを楽しむ者たちの生活・仕事・人間関係などに基づく生き方に根ざしたスポーツ様態から創られるもので、「する・みる」機能の現れ方が異なる。ある者は勝敗の山頂を、ある者は競争や記録の山を、ある者は技術の高度化のケルンをめざす。またある者は仲間とのコミュニケーションに重きをおいた峰を、そしてある者は応援を主とした山岳をそれぞれ選択していく。さらにそれぞれの山頂や峰から他の山岳・峰にも移動が可能で、多様なレベルや質のスポーツの山岳・峰にチャレンジし、ルートが開かれ登頂が可能となる。その場合、個々の山や峰における質的な発展とその担い手の広がり、ミニ富士山型をイメージしうる。

武道などという山は、すでに老年期にさしかかった連山かも知れないし、ニュースポーツなどはまだ標高200～300m程度の新山にすぎない

であろう。それでも頂に登って高見を楽しむ人々はおり、群がる人々のエネルギーがやがて地殻変動を起こし、他の山々に伍して連山に山頂をなすこともあろう。実際ウインドサーフィンやパラグライダーなどのニュースポーツは、エネルギーや力とは違った、水や地形と風という環境・情報の読みと操作を楽しむスポーツであり、競技・記録性や勝敗以上に自然や仲間とのコミュニケーションを楽しむものとして頭角を現してきている。

富士山の山頂からながめる景色は素晴らしいが5合目や8合目ではよく見えないものである。ところがハヶ岳型では隣やその向こうの山が何であるか、面白そうか、厳しそうか、すぐ見渡せる。あれこれと観察・鑑賞し、批評することができる。これは、ハヶ岳型の最も特徴的な構図が示されるのである。

このように「する・みる」一体型の運動文化把握は、それを享受する者達の目的意識によって多様に受けとめられることができる。しかもこの多様性は、かつて80年代初頭にスポーツの競争性や技術性を否定しようとしたトロプス論者たち²¹⁾のように競争性を排除したり、「愚民化」や「低文化化」などといった運動文化の質的享受とその発展を無視するものでもない。それぞれの運動文化の質が存在し、それらは生活、文化、環境、歴史・社会的な条件のもとでスポーツ享受者の欲求・要求を満たし、彼ら自身の変革を前進させる文化として不可欠なものになるのである。高度な技術が見る対象として、自分とは疎縁なものとしてしか存在するのではなく、自らを高め変革させる技術として、手の届く技術としてそれらは目の前に現れるのである。

今日、運動文化・スポーツについてのダイナミックな把握求められている。運動文化・スポーツが全ての人にとって「ひと・人・人間になる」のに必要な文化として創られ、創り変えられるものである以上、人それぞれの生き方と強く結びつかなければならない。それ故運動文化・スポーツは一つの頂点をめざす文化として現れるのではなく、人々の生き方を反映する多様な峰を抱いた連山と

して表現されることになるであろう。

注

- 1) Guttman, A., From Ritual to Record: The Nature of Modern Sports, Columbia University Press, 1978 (清水鉄男訳『スポーツと現代アメリカ』TBSブリタニカ, 1981)
- 2) 草深直臣「運動文化論研究の生成と展開」『保健・体育研究』第2号、立命館大学人文科学研究、1983. 12
- 3) 『同志会ニュース』No. 135、85・11
- 4) 草深直臣『前掲』, p. 52
- 5) 草深直臣『前掲』, p. 63
- 6) 草深直臣「現代と同志会の学力論」『主体形成への道』学校体育同志会大阪支部1985. 8、p. 110
- 7) 丹下保夫『体育原理(下)』追遙書院, 1961, p. 27
- 8) 丹下保夫『同上』, p. 31
- 9) 川合章「『運動文化』論のために一その理論上の問題点」『生活教育』1963. 3)
- 10) 草深直臣『前掲』
- 11) 金井淳二「スポーツ技術と人間」『スポーツの自由と現代 上』青木書店, 1986, p. 149
- 12) 草深直臣「現代と同志会の学力論」『前掲』, p. 110
- 13) 草深直臣『スポーツの自由と現代 上』, p. 39
- 14) 阪田尚彦「体育の授業において技術認識がなぜ問題となるか一その心理学的考察」『運動文化』26、1981. 9
- 15) 草深直臣『前掲』, p. 65
- 16) 『同上』, p. 45
- 17) 中村敏雄『近代スポーツ批判』三省堂新書, 1968, p. 14
- 18) 金井淳二『前掲』, p. 155
- 19) 草深直臣「戦後40年とスポーツの主体形成」『同志会ニュース』1985. 12
- 20) 草深直臣『前掲』, pp. 48~49
- 21) 反スポーツ論者はスポーツに反対するとしてsportを反対から読みtrotsと称した。影山健・岡崎勝編『みんなでトロプス』風媒社, 1988